

地球は面白い

ピーター・コスミンスキー監督の『嵐が丘』(一九九二年)のなかで、キャサリンに目を閉じるよう命じたヒースクリフがこんなセリフを言う。

「もし目を開けたとき、太陽が輝いていたら、君の未来も輝く。雲がたれこめて嵐となったら、それが君の未来だ。」

こんな突拍子もない「占い」ができるのは、数十秒目を閉じている間に天候がまったくと予測もつかない変化をすることがあるハワースであればこそ。

ハワースとは、イングランド北部ヨークシャーの西北端あたりに位置する集村である。短時間の間に、陽光きらめいたかと思えば暗雲がたれこめ、激しい雨が降ったかと思えばにわか

中野 香織

イギリス・ハワース

に晴れ上がる。突風が吹き荒れるときには劇画さながらに「ひゅるる」と音がする。

一面にヨークシャー・ムーアが広がる。ムーアは荒野と訳されるが荒地ではない。木すらまともに成長できない瘦(や)せた土地なのだ。背の低いヘザ

ーが大地をおおう。花の咲く夏

には大地が赤紫色に染まる。

この村の教区牧師館で、エミ

リ・ブロンテは愛憎半ばする激しい情念が吹き荒れる物語『嵐が丘』を書いた(一八四七年)。

牧師館が住居というのは父が牧師だったためで、この家で三女

シャーロット、長男ブランウェ

ル、エミリ、未娘のアンは読書

をし、空想を語りあい、創作活

動に入っていく(長女、次女は

結核で早世)。

今はブロンテ博物館になって

いるこの牧師館に入る。ブロン

テも三十歳でこの世を去った。

人間を長生きさせない厳しい

自然環境。「なぜ神は私に命を

与え、何百とい

う苦痛のみもた

らすのか」とい

うヒースクリフのセリフがエミ

リの心の声に聞こえてくる。こ

いろは余計なおせっかいで、

実はエミリはハワースを離れる

とたちまちホームシックになっ

た。彼女が愛したこの土地は、

やがて「ブロンテ・カントリー」

として巡礼者が絶えない聖地と

なる。吹き荒れる突風の音に不

滅の愛の物語を聞くか劇画の効

果音を聞くか。おのれの資質を

試される気がする地でもありま

す。(服飾史家)

風吹き荒れる文学の地



イラスト・下田 一貴